

# 転換期における社会調査と社会学

東京大学 盛山和夫

## 1 はじめに

社会学という学問にとって社会調査は根本的な基盤をなしている。それは社会学のアイデンティティの不可欠の要素をなしていると言っている。今日、この社会調査はさまざまな面から重大な転換期を迎えている。かなり前から調査環境の悪化や個別面接調査の困難さの増大などが問題として指摘され、それに伴う対応策が検討されてきたが、その一方で近年のデジタル技術の進展は社会調査に新しい可能性を開いた。それには大きく (a) 収集し分析しうるデータの種類、範囲、量の革命的な増大と (b) 分析する手法の著しい進展の2側面がある。Salganik の著書 (2017) は (a) に焦点をあてているが、(b) の計量的分析モデルの発展も著しい。

## 2 検討課題

しかし端的に言って、Salganik は楽観的すぎるように思われる。(1) あまり指摘されていないが、この可能性の急激な拡大はまず第一に「新たな社会調査法およびデータ分析法」の教育と活用の問題を提起している。これは、学部レベルでは一般教養としての調査分析法の教育として、また大学院等では方法上の分断を避け共同の知的コミュニティを形成する上で、重要である。一体、今日、ビッグデータを収集分析できる社会学者は日本に何人いるだろうか。(2) 次に重要なのは、はたしてこうしたデータ収集と分析上の著しい発達はいかにして社会学そのものの発展に寄与するのだろうかという問題である。かつて実証的研究は社会学そのものの発展を中核的に担ってきた。『自殺論』『ストリート・コーナー・ソサエティ』『アメリカ兵』などすぐに想起できる。はたして今日の新しいデータと分析法もこうした役割をはたしうるのか。はたしうるとしたらどのようにしてか。あるいは、現状には何か問題はないのか。これらを厳しく検討する必要がある。(3) ビッグデータやネット調査など新しい手法の多くは従来の「無作為抽出」という論理を満たさないものが多い。そうするとここには「そうしたデータについての分析結果は、いかなる意味において学問的な〈共同知〉たりうるか」という問題が存在している。報告者は基本的には「無作為抽出」ドクトリンからは少し脱却した方がいいと考えているが、いずれにしても知識の普遍性、共同性の基盤をどのように設定するかという重大な課題がある。(4) 今日のデータと分析法の発展の一部は「事象の間の因果関係を解明する」という問題意識に牽引されている側面がある。パネルデータへの関心、統計的因果推論、フィールド実験の隆盛などがそうした傾向を代表している。しかし、今から30年以上も前に論じたように(盛山1986)、因果関係の推定には「理論」が不可欠なのである。(5) 以上の諸側面において、今日の可能性は「理論的探求」とともに展開される必要がある、と言える。

## 3 展望

こうした問題がありながらも、新しく展開されつつある社会調査法と分析法の革新は社会学の発展にとって大きな可能性をもたらすものであることは言うまでもない。本報告においては状況のより詳細な分析とともに、新しい展望を示したい。

盛山和夫 1986「社会学における因果推定の問題—パスモデルにおける Loop をめぐって—」『行動計量学』14巻1号、71-78頁。